

真野ダム建設

湖底に眠る故郷の歴史

歴史の散歩道

大倉地区がダム建設の適地であるとして、県は、昭和26年と昭和32年にダム建設の計画を発表しましたが、故郷が湖底に沈む計画に対して激しい反対運動が起こり、実施が見送られました。3度目のダム計画「真野ダム計画」が示されたのは昭和45年です。この時も住民が反対闘争委員会を立ち上げましたが、議会に提出した反対請願書が審議の末に取り下げられ、昭和49年に解散。その後の交渉をよりよいものにするため、改めて「真野ダム対策同盟会」が組織されました。同盟会は、地域全員の委任を受けて県との交渉に臨み、要求書を提出して妥結交渉を進め、昭和52年には協定書、55年には補償協定書に調印しました。

60戸が水没することになり、一部の住民は村外に転居。昭和56年には水没移転者離村式が行われ、人々も子ども達の歌「ダムに沈む大倉の里によせて」に涙し、別れを惜しみました。多目的ダム「真野ダム」は、昭和60年に、RCD工法による本体工事が始まり、平成3年6月に完成しました。周辺に体育館や橋が整備され、ダム湖は「はやま湖」と命名されました。湖畔には桜が植えられ、「森と湖まつり」や「はやま湖スポーツ少年団対抗駅伝」、花火大会などが催され、地域に愛される名所となっていきました。



真野ダムは平成3年6月に完成しました。写真は同年4月に撮影されたもの。



昭和58年に建てられた記念碑。郷土愛に満ちた碑文は「真野の川」を詠んだ万葉の歌から始まります。

交流センター図書コーナーに、『第24回いいいたてむら読書メッセ「ジゴコンテスト」のコーナーを設けました。寒い日が続きますが、家の中で心豊かに過ごせるよう本を読む時間を作ってみましょう。

2023年いちばん売れた児童書「大ピンチずかん」の第2弾!! 日常に起こりうる様々な大ピンチがレベル、グラフごとに書かれているユーモアあふれる楽しい絵本です。ぜひ手にとって読んでみてください。



「大ピンチずかん2」
作 鈴木のりたけ
小学館
おすすめ図書を紹介します

ふれ愛館だより
交流センター「ふれ愛館」からのお知らせです。

いいいたて 10 イノサル通信

野生動物を撮る2

広報いいいたて8月号で紹介した伊丹沢地区でのセンサーカメラ調査は、開始からもうすぐ1年になりますので、今回は第2回の報告をしたいと思います。伊丹沢以外でも動物の出没の増減には、同じような傾向があると思いますので、対策の参考にしてください。

調査概要 動物を感知して自動で撮影するカメラを10台設置

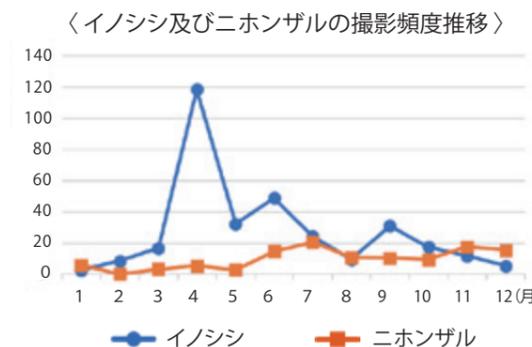
集計期間 令和5年1月21日～12月20日

今回は、被害を起こすことの多い、イノシシ(総撮影頭数938頭)、ニホンザル(311頭)、アライグマ(47頭)、ハクビシン(38頭)について、報告します。なお、グラフの数値は撮影頻度を表しています。

※撮影頻度(100晩あたりの撮影頭数) = 撮影頭数 / (設置晩数 × 設置台数) × 100晩

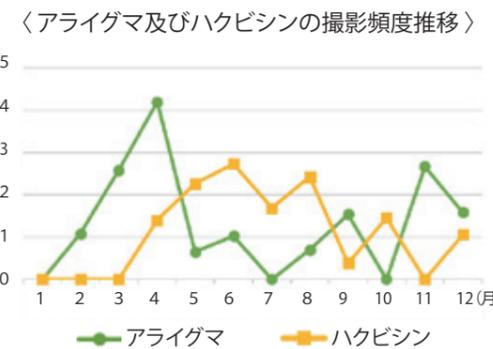
イノシシ

4月は年間を通して最も多く撮影があり、撮影された半分以上が子どもでした。暑さのためか夏場は減少しましたが、秋に一度増え、その後は少しずつ減りました。イノシシは出産数が多く増えやすい動物ですので、減らすためには、母親を捕獲することが重要と言われています。



ニホンザル

5月までは少なかったのですが、6月以降は継続して撮影されました。クリなどの実を食べるために、人家周辺へ出没したのかも知れません。なお、ニホンザルの場合は、群れによってどの時期に、どこで活動するかが違いますので、地域によって出没する時期は異なると考えられます。



アライグマとハクビシン

イノシシやニホンザルに比べると、かなり撮影頭数は少なかったです。アライグマは春と秋、ハクビシンは春と夏に多く撮影されました。被害としては、どちらも家屋侵入と果樹等の食害を起こします。特に子育ての時期である春は、家屋被害が多く報告されます。

調査により、少しずつ地域での動物の動きが分かってきます。今後も調査を継続し、撮影数が多い場所での捕獲検討など「対策への活用」や、出没数が減ったかなど「対策の効果の確認」をしていきたいと考えています。



撮影例
子連れのイノシシ(令和5年4月14日)



撮影例
群れで動くニホンザル(令和5年9月13日)



福島県避難地域鳥獣対策支援員
鉄谷 龍之 さん
平成31年4月から同支援員。令和3年から飯館村の鳥獣対策に携わり、今年度から村の主担当。専門は野生動物管理・鳥獣被害防除。

イノサル通信は村の鳥獣対策を支援する鉄谷さんからのお知らせです。